## 体育学部に移管された天理スポーツ・オリンピック研究室の再出発②―天理スポーツ・オリンピック共同研究室での活動―

難波真理（天理大学体育学部）

本年４月に天理スポーツ・オリンピック研究室がおやさと研究所から体育学部に移管されるのに伴い、私も天理スポーツ・オリンピック共同研究室へと異動してきました。

体育学部での仕事はまず、おやさと研究所時代におこなっていた天理スポーツ・オリンピック研究室の活動をまとめることを中心に、「天理スポーツの継承と発展」をテーマとして、体育学部研究会で発表をしています。この発表は近藤雄二体育学部長が、天理スポーツを継承･発展するためには、天理のスポーツが「天理スポーツ」と呼ばれるようになった背景とそのスピリットも含め学び、つくりあげていくことが求められていることから、これまでの活動成果を学部のなかで共有し、天理スポーツの継承・推進を担う契機にできたらと考えられ、開催することとなりました。研究会は２カ月に１回開催され、第１回は５月に開催しました。

「天理スポーツの継承・発展―その①：これまでの天理スポーツ・オリンピック研究室と今後の展望」というテーマのもと、おやさと研究所で行われてきた成果についてスポーツ・ギャラリー展やシンポジウム、『グローカル天理』連載の内容などを中心に 12 年間の流れを発表しました。体育学部の先生方はじめ、他学部の先生も参加して、「天理スポーツとはなにか」「これからどのようにしていくべきか」などについて討論もおこないました。

第２回は７月に開催しました。タイトルは「天理スポーツの継承・発展―その②：武道」でした。これまで取り上げてきた種目を大まかに３つのカテゴリーに分け、第２回は天理スポーツ・ギャラリー展で武道として集めた種目に柔道、相撲を加えて発表しました。歴史が深い種目も多く、紹介した種目に対する専門の先生方からの補足があるなど非常に興味深い話や意見が多くありました。また、レスリング部が試合に出場するために柔道部の学生を借りておこなった話では、それぞれの監督が当時のエピソードを紹介し、スポーツの先生方が集まって行われる研究会ならではの場面もありました。

天理大学創設者、中山正善２代真柱とスポーツに関する話は、討論の中で森井博之先生にも助言をいただくなどしていますが、建学の精神に関わるような内容については、これからも学内の関係者が正しく継承していく必要があると考えており、今後も逸話なども盛り込みながら発表をしていきたいと考えています。そして、これまでおやさと研究所で紐解いてきた史実を元に、「天理スポーツ」および「天理スピリット」について各競技、各専門分野の方々からご意見をいただき、研究会を通して体育学部並びに関係の先生方と考えていきたいと思います。

次回は９月に「天理スポーツの継承・発展－その③：球技」を開催予定です。以降、その④「身体表現」（仮題）、その⑤「まとめ」（仮題）を行う予定にしています。

７月、８月に行われたオープンキャンパスでは、体育学部の田里千代先生とゼミ学生が企画してくれた「本物のメダルがここにある！」の手伝いをしています。体育学部総合体育館には大きなガラスケースが数台あります。ここに、天理大学関係者がオリンピックや世界選手権で獲得したメダルや写真、大会出場記念品などを展示する作業をおこないました。これまで数回のスポーツ・ギャラリー展を開催してきた経験を生かし、オープンキャンパスに来ていただいた皆さんに、いかに見やすく、わかり易い展示ができるかを考え、下準備をしてきました。展示作業はこの企画をしてくれている学生に指導しながら共同で作業しました。学生のアイディアは見る者の視点から考えた内容が非常に多く、私にとっても参考になることの多い作業でした。

実際に展示した体操競技の銀、銅メダル、柔道の数多くの金メダル､銀メダル､銅メダルを見ている参加者からは「おぉ」「うわぁ」といった感動の声があがっていました。中には、「いつかここに自分のメダルを飾る。」と言ってくれる高校生もいました。テレビなどから間接的に物を見るのではなく、本物・実物を見られることは競技者にとって大きなきっかけを与えるように感じました。

展示したメダルの中から、細川伸二先生がロサンゼルスオリンピック、ソウルオリンピックの柔道競技で獲得された金メダルと銅メダル、正木嘉美先生が柔道世界選手権で獲得された金メダルが体育学部に寄贈され、総合体育館内に常設展示することになりました。また、今年のロンドンオリンピック大会で柔道チーム男子監督として参加された篠原信一先生、穴井隆将選手から寄贈いただいた大会出場記念飾り皿並びにサイン色紙も展示しています。これらの品物を常設展示するとともに、他のガラスケースの展示内容を定期的に変えて様々な競技種目の展示をおこなっていく予定です。

最後に、天理スポーツ・オリンピック研究室が体育学部に移管するにあたり、これまで、おやさと研究所で多大なご支援、ご協力いただいた方々に移管のご報告が遅れましたことをお詫びいたします。また、私の異動につきまして、本来なら研究所在籍中にお世話になりました皆様に直接ご挨拶させていただくべきところですが、この場をお借りして異動のお知らせとさせていただくことをお許し下さい。天理スポーツ・オリンピック共同研究室は体育学部６号棟４階にあります。これまで同様、天理スポーツに関わる情報等ございましたらお気軽にご連絡ください。今後とも、天理スポーツ発展のため、ご指導、ご支援頂きますようよろしくお願い致します。

オープンキャンパス体育学部　総合体育館での展示

## 第 11 回ヨーロッパ宗教学会で発表

堀内みどり

ストックホルムにある Södertörn 大学（宗教学部）で開催された第 11 回ヨーロッパ宗教学会（EASR）の年次大会（世界宗教学宗教史会議とスウェーデン宗教史学会との共催、2012 年 8 月 22 日～ 28 日）に出席・発表した。8 月 22 日フィンランド航空で出発し、ヘルシンキで乗り換え、同日午後 5 時半頃ストックホルムに到着。空港から鉄道、地下鉄、バスが乗り入れるストックホルム･セントラル駅（以下中央駅）までリムジンバス（約 40 分）で移動。ホテルは駅前にあったので、以後の移動にとても便利だった。（時差は約 7 時間）

8 月 23 日より、電車で約 20 分離れた Södertörn 大学へ通う。この日は午前 10 時半より受付が始まり、13 時開会式、13 時 30 分から 14 時 30 分に基調講演があり、いよいよ研究発表に入った。12 の部屋に分れて、4 人で一つのパネルを構成するという形で研究発表が行われた。8 月 24 日～ 26 日は、基本的に 9 時～ 11 時、13 時 30 分～ 15 時 30 分、16 時～ 18 時に研究発表（26 日は 16 時～ 18 時はなし）があり、11 時 30 分～ 12 時 30 分には基調講演が行われた。

今回の年次大会のテーマは「ENDS AND BEGINNINGS」で、その趣旨の中で、宗教の発生を時間からの逃避と捉えたならば、宗教は有限なる人間と永遠なるものとを関わり合わせるという仕方で、時間のもつ有限性を無効にしてきたといえるとし、そのための思想や実践は、儀礼として継承され、継続的に実行されてきた。そして、そうした宗教的実践（儀礼や祈りの形態や思想など）は宗教の起源を探ろうとする研究者たちの関心事となってきた。しかしながら、世俗化が進み、合理的な考え方を持ち迷信が消えていく時にあって、衰退しつつある宗教の終焉を語り、議論することが可能なのかと問うている。

参加者はヨーロッパ各地から参集し、ヨーロッパやロシアにおける宗教のグローバル化による影響、移民と移民が作り出す宗教空間、世俗化の中での既存宗教の変化、スピリチュアルなどなどが取り上げられていた。中心はキリスト教、イスラム教の現代における変容ではあったが、ロシアや中国における宗教の復興の有り様についての発表もあった。また、多民族化や世俗化における宗教的国家の宗教教育の現状、メディアとの関係、ツーリズムについての報告もあり、大変興味深かった。大谷大学が組んだ「Understandings of History and Salvation in Japanese Pure Land Buddhism」では、3 人の研究者が、曽我量深（1875 年〈明治 8〉～ 1971 年〈昭和 46〉、明治～昭和期に活躍した真宗大谷派僧侶、仏教思想家、大谷大学学長、同大学名誉教授）を共通のテーマとし、真宗思想の思想的発展の歴史、「本願」解釈、曽我による親鸞の仏教史についての見解、曽我による新時代に向けての阿弥陀の解釈について論究された。

堀内は 26 日午前に行われた「日本と中国の宗教 I（Religions in Japan and China I）」で「Die to Live: A Study of “the Truth of Origin” in Tenrikyo Teachings Concerning the Concept of “Re-birth”」という題目で発表した。ここでの他の発題者と題目は、以下の通りだった。

Ekisabetta Porcu,
　Pop Religion in Japan: Temples, Icons and Branding
Ugo Dessi,
　Responses to Globalization in Japan: Buddhism, Pluralism, and Inclusivism
＜堀内＞
Michiaki Okuyama,
　Religion and Non-religion in the Modern Japanese Context

全体では、350 以上の発表があり、90 以上のパネルが組まれた。国際大会ということもあってか、いくつものキャンセルがでたが、ヨーロッパの研究者を中心に大勢が参加し、会場は賑わった。各セッションの間の休憩時間や昼食の時には、議論をするグループがいくつもできていた。託児サービスも用意されていて、幼児を連れた参加者もいた。

## 第 251 回研究報告会（7 月 30 日）
## キリスト教系 NGO“ 信仰と悦び ” による教育支援活動の取り組み

野口　茂

グローバル化の伸展や新自由主義の席巻によって、雇用の不安定化や失業、教育・福祉の崩壊など生活の基盤が大きく揺らいでいるいま、コミュニティや帰属、連帯感といったものが再認識されるようになっている。本報告では､近年活発化するローカル・コミュニティの一事例として、さらには宗教・信仰を基盤とした社会貢献活動の事例として、ベネズエラの低所得者層コミュニティ（スラム）におけるキリスト教系 NGO“ 信仰と悦び ”（Fe y Alegría）の活動に着目した。

同 NGO は、1955 年カラカス市のスラムに、イエズス会神父によって小学校が開設されたことが嚆矢となった。当時のベネズエラは、石油開発を基軸に急激な経済成長を遂げつつあったが、一方でその恩恵を享受できない貧困層が増加し、首都カラカス周辺にはスラム街が拡大していた。経済的・社会的理由から教育の機会を奪われているスラムの子供達に教育を施し、貧困の連鎖をくい止めたい。そのような思いから、カトリック大学の学生ボランティアとともに、一神父が小学校の開設に踏み切ったのである。当初は活動の趣旨が理解されずイエズス会との軋轢があったというが、設立から 57 年を迎えた現在では、ベネズエラ国内に 171 の教育施設の他、ラテンアメリカ 16 カ国に合計 4,000 カ所以上の関連施設を設けるまでに至っている。

「アスファルト道路が終わり、水も電気もないところで “ 信仰と悦び ”（Fe y Alegría）は門出する」という同 NGO の設立理念どおりに、かれらの教育施設のほとんどがスラム街や地方の農村地域に設立されているのが大きな特徴の一つである。教職員が、危険で劣悪な環境に身を置き、安い報酬で教育に従事するためには、相当の覚悟と強い信仰心がなければ勤めきれないだろう。事実、多くの学校からは、教員不足の声も上がっている。施設規模の拡大に伴う教員の質と数の確保、財政基盤の安定化、そして現政権とカトリック教会との関係悪化など、さまざまな課題を今後どう克服していけるかが問われている。

## 日台学術交流研究会「人文臨床と無縁社会」

金子　昭

8月31日、標記の研究会が台湾・花蓮市の慈済大学にて開催された。サブテーマは「人間的ケアはいかに可能か―さまざまな現場実践より」。主催単位は慈済大学のほか、中央研究院及び日本の関西大学。私も日本側の開催実行委員を務めた。日台双方よりあわせて約30名の研究者・実践活動家が参加した。日本からは、科研基盤研究（C)「無縁社会における宗教の可能性に関する調査研究（研究代表・宮本要太郎)」の研究グループ7名が参加した。

同科研グループは、今年（2012年）1月、韓国・ソウル市の円光大学にて「無縁社会と宗教者―日韓の現状」というテーマの下、日韓学術交流研究会を企画・開催した。今回の日台学術交流研究会は、内容的にはそれを引き続き、学際的な規模をより発展させたものと位置付けることもできる。この研究会は、無縁社会と言われる昨今の社会状況に対して、日本と台湾で取り組まれている現場実践について、日台の研究者や実践者が報告を行い、討議を行う初めての研究交流の試みとなった。

近年、宗教の社会参画・社会貢献という分野に注目が集まっているが、日台ではその関わり方や社会的評価とでは、共通する部分もあれば相違点もある。また、宗教者であるなしにかかわらず、人々が地域社会でともに生きる場を形成するにあたって、草の根的なつながりや「縁」づくり（支縁）は不可欠である。そこに、生きる現場に密着した人間的な関わり方やケアが強く問われてくる。このテーマを扱う領域こそ、広い意味での「人文臨床学」といえる。この日台学術研究交流会のテーマが「人文臨床と無縁社会」となっているのも、そこに理由がある。

研究会では、宮本要太郎・関西大学教授による「無縁社会への宗教者の関わり」の基調発題に続き、「災害被害者及びその支援の課題」、「台湾先住民及びその支援の課題」、「精神病患者・信仰周縁にいる人々の課題」、「都市社会底辺層及びその支援の課題」の4部で日台より計13本の発表が行われた。これらの発表の後、総合討論が行われた。

テーマと発表者は次の通り。

村島健司（関西学院大学)：仏教の地域社会化と祭祀圏―九二一大地震後の被災地における慈済会と民間宗教の邂逅

黄智慧（中央研究院)：八八水害後の村落再建における文化伝承、部落の解体とエスニックグループのアイデンティティ危機

稲場圭信（大阪大学)：東日本大震災における宗教者の支援活動

顧瑜君（東華大学)：「無縁」から「有縁」にいたる五味屋

曾麗娟（国防大学)：都市での風俗営業に従事する先住民女性及びその家族の生活再建支援

マユエ・ビホウ〔馬躍・比吼〕（台南市政府)：ドキュメンタリー映画「山の中の微光」－ダカヌワ（達卡努瓦）部落の女性と災害後の復旧再建

サロン・イスハハンブドゥ〔莎瓏・伊斯哈罕布德〕（映画監督、プロデューサー)：ドキュメンタリー映画『アリスの願い』―ブヌン族女性のライフヒストリーと部落の移り変わり

陳妊湲（中央研究院)：ケア治療と隔離収容の間―日本統治時代の精神病院を語る

中西尋子（関西学院大学)：無宗教の日本人と韓国系プロテスタント教会

田麗珠（台北市立聯合病院)：ホームレスへの医療ケア―台北市聯合病院を事例に

白波瀬達也（大阪市立大学)：現代日本における生きづらさと宗教―宗教の新しい社会参加のかたち

渡辺順一（金光教教会)：「ホームレス支援」から「支え合いのまち」づくりへ―「宗教」を拠点にした地域「支縁」活動

方孝鼎（朝陽科技大学)：公私セクターによるホームレス支援の回顧及び批判

慈済大学での研究会の様子

翌9月1日、2日には、それぞれ花蓮近郊及び台北市内で活動しているNPO団体を訪問し、その活動の様子を見学した。1日は、昔の日本人移民の家を改造して村起こしに努めている「五味屋」、また先住民族の子弟教育に力を入れている「啄木鳥全人教育協会」、また先住民族の伝統文化の再興に努めているタバラン部落やサンシン（山興）部落などを貸切バスに乗って廻った。この見学旅行は、とりわけ我々日本側参加者にとっては大変新鮮で印象的なものとなった。2日は、台北市先住民ケア協会を訪問し、丸山陽子副代表より、先住民女性とその子弟のケアについて詳しく説明を受けた。丸山氏は日本の山梨県出身であるが、キリスト教（神召会）の先住民牧師と結婚して、16年前から台北市内でこの活動を続けている。

今回の研究会及び訪問見学を通じて、とくに宗教系のNPO活動実践のあり方を考える上で、日台の間では相違点もあるが、それ以上に共有できるものが多いことをあらためて感じた。双方の研究成果をまとめていけば、この分野に関する有益な学術的貢献になると考えている。

復元された先住民族（アミ族）の家の前で

## 若者の集い「ジェンフェスト」に参加

深谷耕治

8月30日から9月2日まで、ハンガリーはブダペストでフォコラーレ運動が主催する「ジェンフェスト」(Genfest) と呼ばれる若者の集いに参加した。フォコラーレ運動とは、イタリアでキアラ・ルービック (1920～2008) によって始められ、友愛 (love) によって世界の「一致」(unity) をすすめるカトリックを中心とした運動であり、現在200万人の賛同者・共鳴者を得ている。今回のような世界各地から集まる規模のものは2000年以来12年ぶりらしいが、およそ180の国と地域から10代から30代を中心とする1万2000人の若者がブダペストに集まった。

プログラムは大きく3つで構成されていた。

①アリーナ行事。ブダペストの中心に1万2000人が十分に入れるアリーナがあり、30日の夕方は前夜祭としてコンサートが開かれた。翌日の午後は、その雰囲気のまま開会式が行われた。音楽やダンスの合間に、ブダペスト市長やユニセフの会長が挨拶を述べていた。

翌9月1日の午前中は、フォコラーレ運動に賛同する若者の体験発表があった。エジプト出身の者は自国の不安定な社会にあって街の壁に絵を描くプロジェクトを通して皆が安心できるコミュニティが生まれたこと、あるいはタイ出身者は洪水という自然災害に向き合う中で感じる友愛を発表していた。また、スイス出身で新婚の男女は神が二人の愛を見守っている信念を語っていた。その他、メキシコのドラッグ問題、チリの浮浪者問題といった社会問題を取り上げて自身の信仰を語るものもいれば、フィリピンの出身者は親の別離という苦い体験を乗り越えて父親を「許す」精神を発表していた。体験発表の合間には、国連の会議で意見を述べるキアラのビデオが流された。

②ブダペストの街を行進。その後、1日の夕方からは、「平和」(peace) と「友愛」(fraternity) を世界に発信するために、ブダペストの街を夜中まで行進した。最終的にブダペストの観光スポットの一つである「くさり橋」の前で今回のスローガンである「橋をかけよう」(Let's Bridge) を表明するごとく、それぞれの決意を書いたスカーフを大音量の曲が流れる中誰彼かまわず交換し続けて、曲が止まると同時にその時手に持ったスカーフを頭上にあげた。

③プレゼンテーションで交流。最終日の2日の午前中は日曜日ということもあって、キリスト教徒がミサをしている間、他宗教の者にはそれぞれの紹介をする時間が設けられた。とはいえ大多数はキリスト教徒であり、集まったのはヒンドゥー教やイスラームなど異なる信仰を持つ130人程度だった。日本からは立正佼成会が20人ほどの若者を送り出しており、妙智会から4人参加していた。天理からは私も含めて5人が出席した。

個人的な感想としては、パレスチナ人ムスリムと会話できたことが新鮮であった。

## 日本宗教学会第71回学術大会報告

9月7日から9日まで皇學館大学にて標記大会が行われた。7日午後からの公開シンポジウム「ためされる宗教の公益」では、3・11震災のその時に臨んだ宗教、そしてその後の復興に臨んでいる宗教の社会的役割が「公益」という観点から問い返された。被災地において在来の諸宗教や外からの宗教ボランティアはどう機能し、どのように受け止められたのか、宗教的使命感から動いた人々にジレンマはなかったのか、復興の過程で宗教はどのような位置を占め得るのか、宗教の祈りは災害下にある社会や復興しつつある社会の中でどのような意味を持ちうるのか、などの議論が交わされた。翌8日、9日の個人研究発表やパネルにおいても「災害・宗教・支援」や「宗教の公益性」に関するものが数多く見られた。

天理大学関係者の発表題目は以下の通りである。

岡田正彦「近代仏教研究における文献史料と文化資料―梵暦資料の多様性―」(パネル「宗教史研究のフィールドワーク論」)
金子珠理「ソーシャルキャピタルとしての天理教里親活動」
澤井義次「宗教的信における超越とその構造―諸井慶徳の宗教論―」(パネル「宗教における死生観と超越」)
島田勝巳「「推測」と＜否定神学＞―クザーヌスの所論をめぐって―」
幡鎌一弘「法華山一乗寺巡礼札からみる西国の出身地域について」
幡鎌一弘(パネル「神祇伯白川家と伯家神道」のコメンテータ)
ファン・ホセ・ロペス・パソス「井筒俊彦においての禅思想とその理解」
堀内みどり「「道の台」と天理教の女性」
松田健三郎「メルロ＝ポンティと祈り」
山田政信「想像・創造される場としてのプロテスタント教会」(パネル「移民と宗教を結ぶホームランドへのノスタルジア」)

また学外からの天理教にかんする発表として、永松和郎氏(九州大学)の「「みかぐらうた」から見る身体技法の翻訳―タイの天理教の事例―」と、寺田喜朗氏(大正大学)の「新宗教の震災対応―創価学会と天理教の取り組みを中心に―」(パネル「東日本大震災後における〈いわき市〉と宗教」)があった。

(金子珠理　記)

グローカル天理
第13巻　第10号　(通巻154号)
2012(平成24)年10月1日発行
発行者　深谷忠一
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒632-8510　奈良県天理市杣之内町1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp
印刷　天理時報社
Printed in Japan
© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University